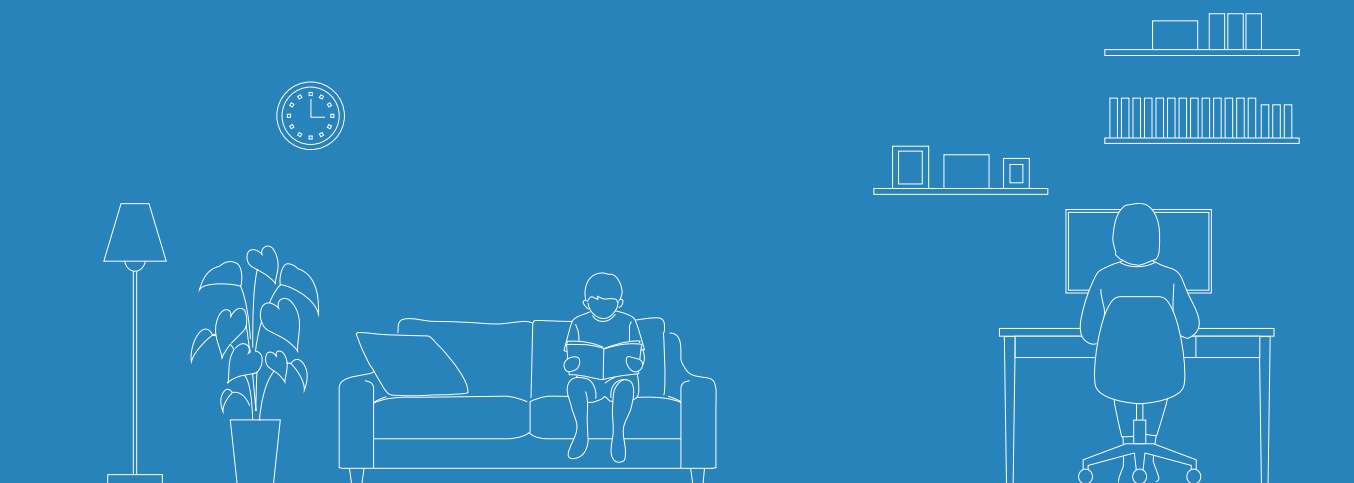


2022年版

これからの時代に求められる 住まいのあり方

次世代を育てる住まいの提案



ミサワホーム総合研究所フューチャーデザインセンターでは、コロナ禍を経て変化した生活者の意識を調査し、これからの時代に求められる住まいの内容を「次世代を育てる住まいの提案（2022年版）」として調査研究をベースに提案をまとめました。この報告・提案は主に2021年に実施したいくつかの調査・研究をもとにしています（巻末参照）。

2022年4月現在でも、世界で感染症が流行しています。日本でも同じく感染対策の中で日常生活が営まれています。新型コロナウイルス感染症の影響に差がある様に、日本と海外の生活習慣や文化には違いがあります。現在住まいを建てようと思っている方のみでなく、海外から戻りたいと思っている人など、日本の生活者のくらしの価値、住まい環境の事情、そしてどのような住まいづくりが考えられるのか、参考にしていただければ幸いです。

概要

Part1 生活意識の変化

在宅時間が増えてイエナカを充実する傾向強まる

コロナ禍を経て日常生活の常識は大きく変化しました。在宅時間は増えて、家の中のモノなどを見直し快適にしたいという傾向がはっきりしました。

生活者の関心度は、「外出着」から「部屋着」へ、「メイク」より「基礎化粧品」へと変化し、「家族との食事」、「住まいの重視度」が上がったなど、家の中でのくらしを充実させる傾向が見て取れ、衣食住の常識が大きく変わっている様子がうかがえます。

Part2 日本の住まいの課題

住まいを検討する人の課題は、面積、収納、間取り

くらしの中のモノは減らしたい人が多い一方、充実させる傾向も強まる

住まいを検討している方は面積、収納、間取りが依然として大きな課題であることが確認できました。また、家の中を衛生的な視点が強まり、快適にする工夫も取り入れたいことがわかりました。家族のコロナ罹患を経験した方々については、自分がかかった場合、家族がかかった場合とニュアンスは違いますが、生活の中でトイレ、食事、入浴について困っていました。

Part3 次世代を育てる住まいの在り方

人生100年時代を迎え、どのステージでもくらしにフィットできる環境整備が必要

これらの調査や研究を踏まえ、子育て期におけるミサワホームの住まいづくりのガイドライン「ホームcommons設計[®]」を見直し、ホームcommons設計2.0として改訂しました。家族にとって負荷が高い子育て期を成長段階に合わせてどのように住みこなして行けばよいか、提案としてまとめました。

【住まいづくりの変化点】

- ① 子ども中心の住まいから、住まい手全員が主役になる住まいへ
- ② 専用空間中心から、多用途空間へ
- ③ その時の気分や状況にあわせて空間を使い分ける

Changes in Lifestyle awareness

在宅時間が増えてイエナカを充実する傾向強まる

— 生活者にコロナ前との変化を聞いた生活者の意識変化調査より —

① 生活価値観の変化

「在宅時間の増加は約7割」

- 1) 在宅時間の変化はコロナ前と比べて72.2%が増えたと答えた(図1)
- 2) 生活の価値観が変化したのは4人に3人(75.2%)で、その約半数は「良い変化だった」(図2)
- 3) 年代が上がるに連れ、「良くない変化」の比率が高まる傾向となった(図3)

図1 在宅時間の変化

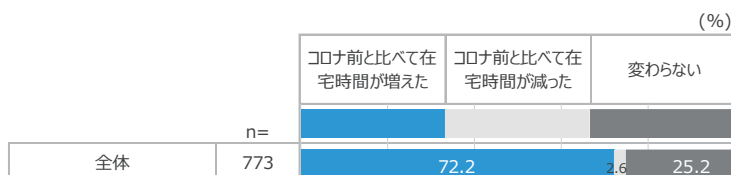


図2 生活価値の変化

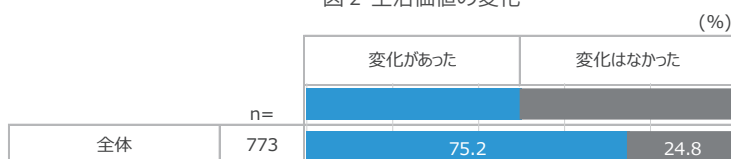
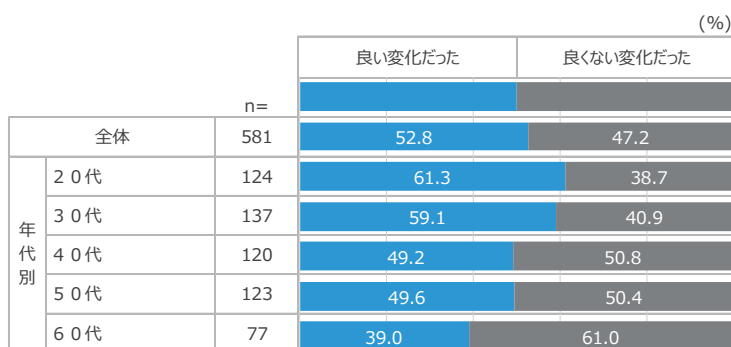


図3 変化の内容



一度目の緊急事態宣言から約1年たった時点(2021年3月)で生活者の意識変化を聞いたところ、新型コロナウイルスの流行はオフィスワーカーの働き方を大幅に変えた様子が見え始める。出勤せずに在宅でテレワークを行うスタイルの普及や外出自粛の影響などもあり、在宅時間の増加は約7割となっている。その結果、健康的不安や仕事に対する常識、デジタルへの慣れなど、それぞれの世代が置かれている環境や常識、習慣などが良し悪しに差が出ていることが推察される。

② 生活者の関心・意識変化

「衣食住の関心度の変化」

くらしに関わる衣食住について 項目別に関心度に変化があった人に聞いた設問

1) 衣食住で関心の高くなった項目

「衣」「食」「住」に対して関心度を聞いた設問では、それぞれコロナ前から関心が「高くなった」と答えたものは、「衣」（ファッションなど）に関しては、「部屋着、普段着」80.3%、「食」（食環境）に関しては「食材」94.4%、「住」（住環境）に関しては「自分の住まい」93.2%となった。

2) 衣食住で関心の低くなった項目

一方、コロナ前から関心が「低くなった」と答えたものは、「衣」に関しては、「外出着」82.7%、「食」に関しては「外での知人・友人たちとの会食」87.9%、「住」に関しては、「近所付き合い」で61.3%となった。

外出自粛の影響を受け、外に出て人間関係を保つ際に必要な要素や行為の関心度が低くなっている。一方で自宅で利用するもの、自宅での生活を豊かにするものは高くなる傾向であり、「外出着」と「普段着・部屋着」の回答差、「メイク」と「スキンケア」の回答差などに顕著に現れている。食事についても、「食材」「献立・メニュー」「お取り寄せグルメ」「自宅での家族との食事」は9割超と非常に高く、自宅を中心としたハレの場（非日常）ではなく、ケの場（日常）を充実させる傾向が顕著であった。

図4 衣食住の関心度の変化
(関心度に変化があった人に聞いた設問)

		n=		高くなった		低くなった	
衣	外出着	271	17.3	82.7			
	部屋着・普段着	198	80.3	19.7			
	靴やカバン・バッグ	182	19.2	80.8			
	ジュエリーやアクセサリー	146	24.7	75.3			
	スキンケア化粧品	167	67.1	32.9			
	メイク化粧品	174	23.0	77.0			
食	食材	216	94.4	5.6			
	献立・メニュー	190	93.7	6.3			
	お取り寄せグルメ	228	94.3	5.7			
	自宅での家族との食事	245	93.9	6.1			
	自宅での来客を招いての会食	168	26.2	73.8			
	外での家族との食事	286	23.1	76.9			
	外での知人・友人たちとの会食	273	12.1	87.9			
	自宅での飲酒	224	83.9	16.1			
住	お店での飲酒	249	12.9	87.1			
	自分の住まい（家）	264	93.2	6.8			
	近所付き合い	119	38.7	61.3			
	利便性の良い環境	150	66.0	34.0			
	自然豊かな環境	153	88.2	11.8			

「食事に対する意識の変化」

家庭内で対話が行われる食の場について聞いた設問

1) 家庭での食事に対する意識変化

コロナ前後の家庭での食事に対する意識変化を聞いたところ「変わった」が64.8%であった(図5)。「変わった」という人を対象に、コロナ前と後で「家族と一緒に食べたい」か「別々に食べたい」かを聞いたところ、コロナ前は「家族一緒に食べたい」が69.6%であった。コロナ後は73.3%となり、コロナ前より3.7ポイント高まった(図6-1、図6-2)。

2) 末子が中学生以上の子どもの食事

ライフステージ別に見ると、末子が中学生以上の子どものもつ人で「家族一緒に食べたい」人が68.9%からコロナ後は81.1%となり、12.2ポイント増と大幅に高くなっている(図6-1、図6-2)。

家庭での食事に対する意識変化は、一緒に食べたい傾向が強まり、家庭での団欒の場として食の場の意義はより一層強まっていることがうかがえる。特に、中学生となると部活や学習塾など、高校生以上となると生活のリズムが合わなくなりやすいライフステージであり、親子の対話の時間が少なくなる時期だが、それらの子どもを持つ家庭で、改めて親子の関係性が強まっている可能性が考えられる。

家族以外の人に加わる食の場について聞いた設問

3) 家族以外の人に加わる会食

家族以外の人に加わる会食について、自宅か外のどちらが好きかと聞いた設問では、「外での会食(以降、外食派)」が63.5%、「自宅での会食(以降、自宅派)」が36.5%となり、外食派が多い結果となった(図7)。

4) 外食派の理由

外食派、自宅派についてそれぞれ理由を聞いてみたところ、外食派に関しては「自宅だと準備や片付けが大変だから」が最多で69.0%、ついで「美味しい料理が食べられるから」59.1%「雰囲気の良い場所を選べるから」40.5%となった(図8)。

5) 自宅派の理由

自宅派の理由を聞いてみたところ、「自宅だとリラックスできるから」が最多で48.9%、次いで「みんなとにぎやかに過ごしたいから」29.4%「外食より費用が安く済むから」27.0%の順となった(図9)。

コロナが収束すれば再び家族以外の人との会食が増えることが考えられるが、外食派が多い一方で自宅派も36.5%いることから、自宅の環境で会食を楽しみたいニーズも一定数あることがうかがえる。外食派に関しては7割が積極的な理由ではないことを考えると、自宅での準備、片付けが大変だと感じる人が多いことが推察できる。食材、料理、片付けなど、食事のサービスが充実することで自宅派が増える可能性も推察される。

図5 食事に対する意識変化

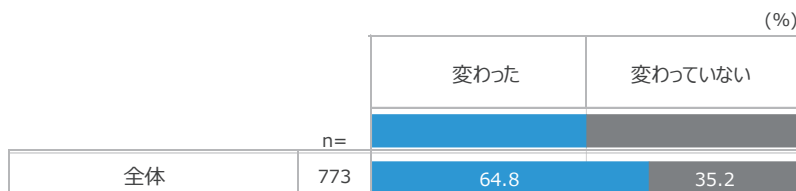


図 6-1 食事に対する意識変化（末子年齢別）

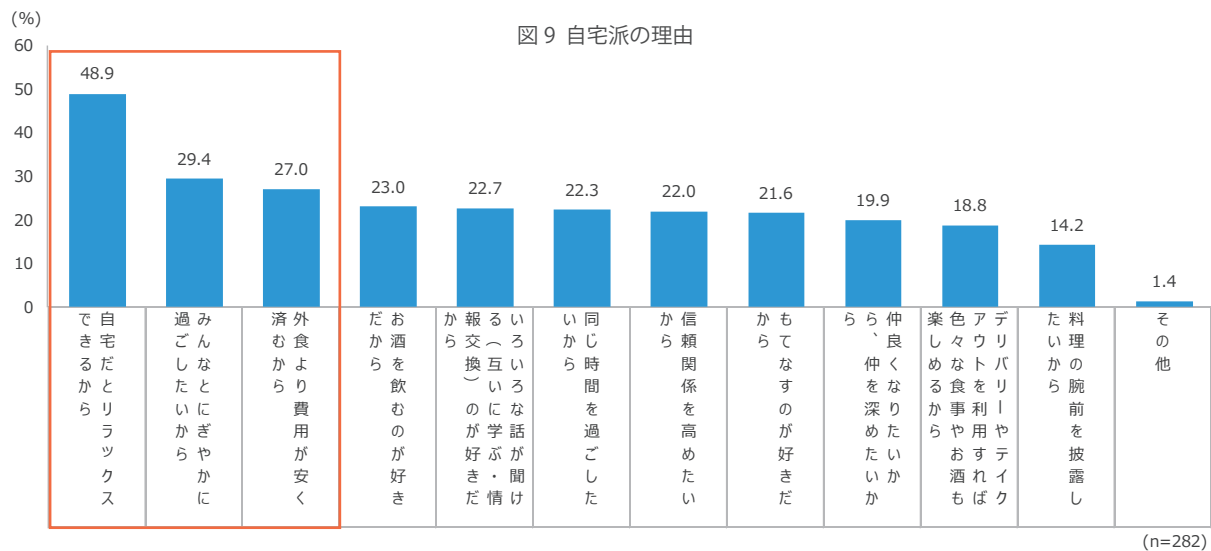
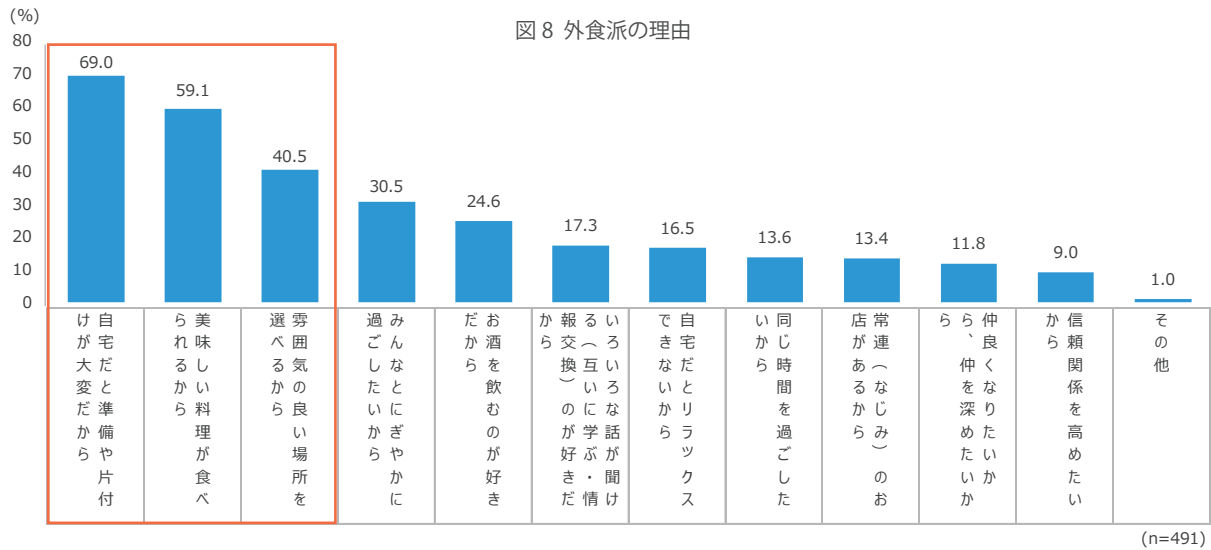
		(%)	
		変わった	変わっていない
全体		64.8	35.2
末子の年代	乳児	70.9	29.1
	幼児	72.0	28.0
	小学生	69.8	30.2
	中学生以上	59.6	40.4
	子供非同居、子供なし	60.7	39.3

図 6-2 食事意識変化あり、共食意向（一緒／別々）

		コロナ前					コロナ後						
		TOP2		BTM2			TOP2		BTM2				
全体		42.5	69.6	27.1	13.0	9.0	8.4	51.7	73.3	21.6	9.2	8.6	9.0
末子の年代	乳児	50.7	32.9	5.5	5.5	5.5	5.5	63.0	16.4	8.2	9.6	7.7	
	幼児	44.4	26.7	11.1	6.7	11.1		46.7	25.6	7.8	10.0	10.0	
	小学生	43.3	23.9	14.9	7.5	10.4		50.7	14.9	13.4	4.5	16.4	
	中学生以上	40.0	68.9	28.9	15.6	10.0	3.6	58.9	81.1	22.2	7.8	8.9	2.2
	子供非同居、子供なし	39.2	25.4	14.9	11.6	8.8		46.4	23.8	9.4	8.8	11.6	

図 7 外食派／自宅派

		(%)			
		自宅での会食	どちらかといえば、自宅での会食	どちらかといえば、外での会食	外での会食
全体	773	18.5	18.0	37.5	26.0
		36.5		63.5	



「住まいに対する意識の変化」

住まいについて聞いた設問

1) 住まいに対する重視度の変化

コロナ後の一年間で住まいに対する重要度の変化について聞いたところ、「とても高くなった」が42.2%、「やや高くなった」が36.2%で約8割が高くなったと答えた（図10-1）。

2) 住まいについて家族と会話する機会

コロナがきっかけで住まいについて家族と話す機会の増減を聞いたところ、63.6%が「機会が増えた」と答えた（図10-2）。

緊急事態宣言などの外出自粛の社会情勢で、生活者は自宅での生活を余儀なくされる状態でもあった。以前より長時間、自宅という住まいでの生活を経験し、住まいについて一層興味を持って向き合っていることがうかがえる。また、家族が自宅にいる時間が増えたことで家族間の会話頻度が増えたと推察できる。

図10-1 住まいに対する重視度

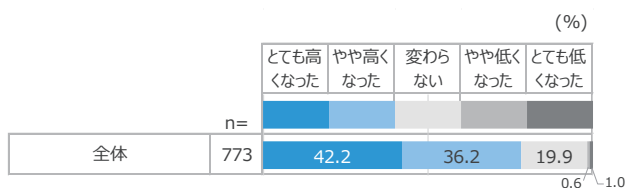
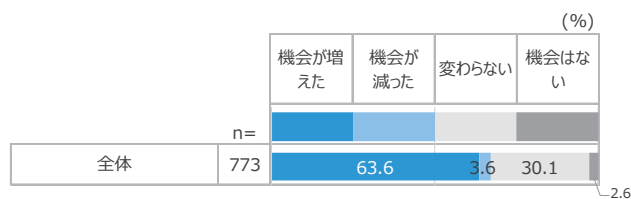


図10-2 住まいについて家族と話す機会



「ライフスタイルについての関心度の変化」

コロナ前後でのライフスタイルにおいて、【自分】【社会的関係】【時間】【家事】のカテゴリーを設定し、それに関する内容について重視度の変化を聞いた。

コロナの後に重視している総数を示す「コロナ前から重視していて、現在も重視している（以降、コロナ前から重視）」回答と「コロナ前は重視していなかったが、コロナ後から重視している（以降、コロナ後から重視）」回答の合計は【自分】についての「身体の健康」が86.4%で最多となり、ついで【自分】についての「心の健康」が81.7%となった。

コロナ後から重視度が上がった「コロナ前は重視していなかったが、コロナ後から重視している」に着目してみると、【時間的】の「在宅で仕事をする時間」が23.2%、ついで【自分】の「心の健康」、【時間的】の「運動する時間」がともに20.1%と並んだ。

コロナ前は重視せず、コロナ後に重視している項目の最も高かったのが【時間的】の「在宅で仕事をする時間」であることを考えると、コロナ禍でワークスタイルが変化し、今まで住まいの中で意識されていなかった在宅での仕事が入ってくることにより、自ら心身の健康管理をしっかりやることや自己実現を意識することが、より一層意識されていることが推察できる。

【自分】重視の項目

【自分】重視の項目の中で、「コロナ前から重視」の回答と「コロナ後から重視」の回答の合計は自分の「身体の健康」が86.4%で最多、ついで自分の「心の健康」が81.7%、「スキルアップ、自己研鑽」が57.6%となった。「コロナ後から重視」のみで見ると、「心の健康」が20.1%と最多であった。

【社会的関係】重視の項目

【社会的関係】重視の項目の中で、「コロナ前から重視」の回答と「コロナ後から重視」の回答の合計は、「家族や親戚」が80.8%と最多であった。ついで「友人・知人」が69.9%「仕事仲間」が59.8%の順となった。「コロナ後から重視」のみで見ると、「近所の人々」が13.2%と最多であった。

【時間的】重視の項目

【時間的】重視の項目の中で、「コロナ前から重視」回答と「コロナ後から重視」回答の合計は、「食事の時間」「家族と会話する時間」がともに79.3%、「睡眠の時間」が78.5%となった。「コロナ後から重視」のみで見ると、「在宅で仕事をする時間」が23.2%と最多であった。

図 11 ライフスタイルの重視度変化

						(%)	
		コロナの前から重視していて、 現在（コロナ後）も重視している	コロナの前は重視していなかったが、 現在（コロナ後）は重視している	コロナの前は重視していたが、 現在（コロナ後）は重視していない	コロナの前も後も、重視していない		
n=							
自分重視	スキルアップ、自己研鑽	773	46.3	57.6	11.3	4.9	37.5
	身体の健康	773	67.8	86.4	18.6	1.4	12.2
	心の健康	773	61.6	81.7	20.1	3.5	14.9
社会的重視	家族や親戚	773	70.6	80.8	10.2	4.3	14.9
	仕事仲間	773	48.8	59.8	11.0	8.9	31.3
	趣味仲間	773	38.8	11.4	9.4	40.4	
	友人・知人	773	59.8	69.9	10.1	11.0	19.1
	近所の人々	773	28.7	13.2	8.5	49.5	
時間的 重視	食事の時間	773	66.8	79.3	12.5	3.0	17.7
	晩酌の時間	773	37.5	12.2	5.8	44.5	
	コーヒータイム、ティータイム	773	51.7	13.3	4.5	30.4	
	入浴の時間	773	51.6	14.1	3.2	31.0	
	睡眠の時間	773	67.4	78.5	11.1	3.0	18.5
	家族と会話する時間	773	66.4	79.3	12.9	2.8	17.9
	在宅で仕事をする時間	773	26.4	23.2	4.3	46.2	
	運動をする時間	773	47.0	20.1	7.4	25.6	
	余暇を楽しむ時間	773	60.2	14.9	7.6	17.3	
家庭内 重視	炊事	773	55.1	68.4	13.3	3.2	28.3
	洗濯	773	52.8	11.8	3.6	31.8	
	掃除	773	53.8	68.9	15.1	3.4	27.7
	買い物	773	55.5	70.0	14.5	5.7	24.3
	育児	773	45.9	8.4	2.2	43.5	
	介護	773	23.2	7.8	3.0	66.1	

【家庭内】重視の項目

【家庭内】重視の項目の中で、「コロナ前から重視」回答と「コロナ後から重視」回答の合計は、「買い物」が70.0%、「掃除」68.9%、「炊事」68.4%の順となった。中でも「掃除」は、「コロナ後から重視」の回答が15.1%であり、コロナによって衛生意識が高まり、重視されている可能性が推察される（図11）。

・家事（炊事、洗濯、掃除、買い物）の男女別重視度

炊事、洗濯、掃除、買い物の4つの家事のうち、「コロナ前から重視」回答と「コロナ後から重視」回答の合計は、男性は「買い物」63.1%、「掃除」60.6%、「炊事」59.6%、「洗濯」55.6%の順となり、女性は「掃除」79.5%、「炊事」79.4%、「買物」78.5%、「洗濯」75.7%の順となった。

4つの家事を「コロナ後から重視」のみで男女別にみると、男性は「炊事」15.2%、「掃除」「買い物」とともに15.0%の順となり、女性は、「掃除」15.4%、「買い物」13.9%、「洗濯」11.6%の順となった。

男性は「コロナ後から重視」が最も大きかったのは炊事であり、在宅時間が長くなった影響がうかがえるものの、コロナ後においても全般的に女性にくらべて家事の重視率は低い。
女性は、コロナの影響からか掃除の重視度が高くなっており、衛生意識がより強くなっている様子がうかがえる。

図12 家事の重視度変化

		買い物 (%)				掃除 (%)						
		コロナの前から重視、コロナ後も重視	コロナの前は重視していない、コロナ後は重視	コロナの前は重視、コロナ後は重視していない	コロナの前も後も、重視していない	コロナの前から重視、コロナ後も重視	コロナの前は重視していない、コロナ後は重視	コロナの前は重視、コロナ後は重視していない	コロナの前も後も、重視していない			
n=												
全体	773	55.5	70.0	14.5	5.7	24.3	53.8	68.9	15.1	3.4	27.7	
性別	男性	773	48.1	63.1	15.0	6.1	30.8	45.6	60.6	15.0	4.9	34.6
	女性	773	64.6	78.5	13.9	5.2	16.2	64.1	79.5	15.4	1.4	19.1

		炊事 (%)				洗濯 (%)					
		コロナの前から重視、コロナ後も重視	コロナの前は重視していない、コロナ後は重視	コロナの前は重視、コロナ後は重視していない	コロナの前も後も、重視していない	コロナの前から重視、コロナ後も重視	コロナの前は重視していない、コロナ後は重視	コロナの前は重視、コロナ後は重視していない	コロナの前も後も、重視していない		
n=											
全体	773	55.1	68.4	13.3	3.2	28.3	52.8	11.8	3.6	31.8	
性別	男性	773	44.4	59.6	15.2	4.7	35.7	43.7	11.9	5.6	38.8
	女性	773	68.4	79.4	11.0	1.4	19.1	64.1	11.6	1.2	23.2

Challenges of Housing in Japan

住まいを検討する人の課題は、面積、収納、間取り くらしの中のモノは減らしたい人が多いものの、 充実させる傾向も強まる

— 生活者の意識変化調査、コロナ罹患家族調査より —

生活者の意識変化調査より

① くらし方の価値観

くらしの中でのモノに対する基本的スタンスにどのような影響があったのか、家の中のモノの価値観について聞いた。

「家の中のモノは減らす」のコロナ後の合計は81.1%（「コロナ前からそう思っていてコロナ後もそう思う」と「コロナ前はそう思っていなかったが現在はそう思う」の合計）となり、家の中はすっきり片付けたい傾向が推察できる。一方で、「家の中のモノを充実させる」のコロナ後の合計は64.8%であり、モノを充実させたい意向も高まっている。長期時間過ごす空間だからこそ身の回りを見直すと同時に充実させたい傾向もうかがえる。

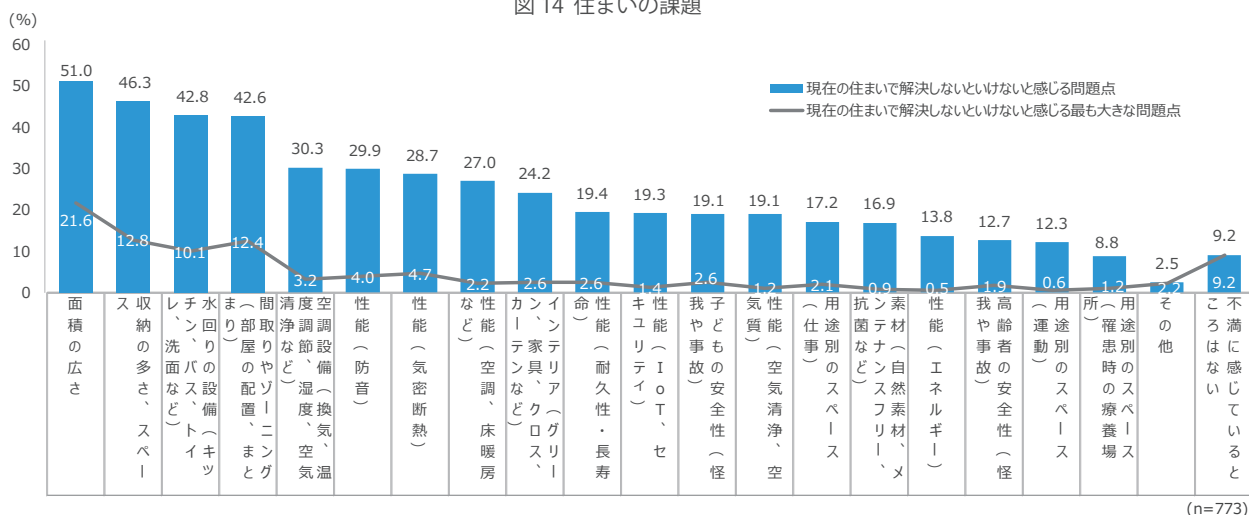
図13 モノに対する価値観

	n=	コロナの前からそう思っていて、現在（コロナ後）もそう思う				コロナの前はそう思っていなかったが、現在（コロナ後）はそう思う		コロナの前はそう思っていたが、現在（コロナ後）はそう思わない		コロナの前も後も、そう思わない			
		61.2	19.9	3.0	15.9	38.0	26.8	9.1	26.1	47.9	18.1	10.1	23.9
家の中のモノは減らす	773	81.1											
家の中のモノを充実させる	773				64.8								
家の中のモノは所有物の方が良い	773												
家の中のモノはレンタルやシェアリングでも良い	773												

② 現在の住まいの課題

現在の住まいで解決しないといけない問題点については、「面積の広さ」が最多で51.0%、ついで「収納スペース」46.3%、「水回りの設備」42.8%の順となった。中でも、最も大きな問題点を聞いたところ、「面積の広さ」21.6%、「収納の多さ」12.8%、「間取りやゾーニング」12.4%の順となった。

図14 住まいの課題



(n=773)

現在の住まいで解決しないといけない問題点の上位3項目（面積の広さ、収納の多さ、水回りの設備）について、子どもの末子年齢別にみたところ、末子が乳児、幼児の回答者が末子が中学生以上の回答者に比べて総じてポイントが高かった。

図 15 末子年齢別 住まいの課題（上位3項目）

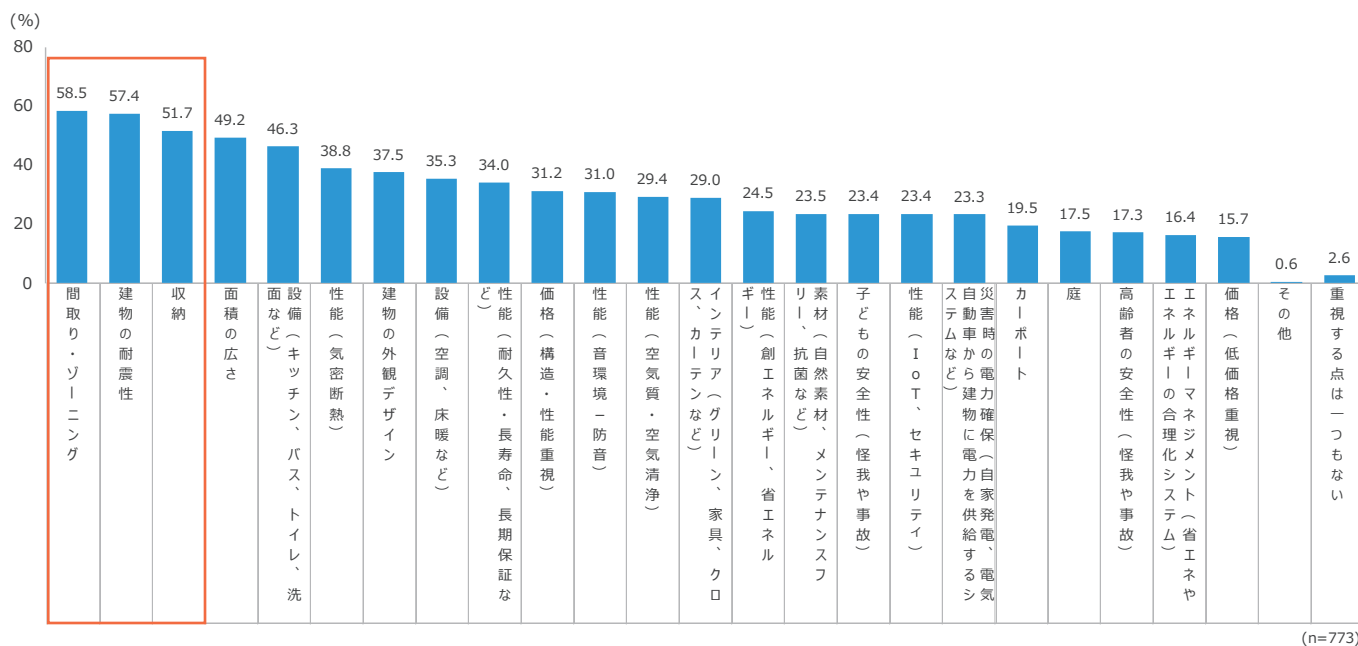
		n=	面積の広さ		収納の多さ、スペース		水回りの設備（キッチン、バス、トイレ、洗面など）	
全体		773		51.0		46.3		42.8
末子の年代	乳児	103		66.0		60.2		47.6
	幼児	125		65.6		55.2		40.8
	小学生	96		52.1		49.0		46.9
	中学生以上	151		38.4		36.4		31.8
	子供非同居、子供なし	298		45.6		41.9		46.3

乳児・幼児の時期は、子どもを見守る場所や育児道具、玩具など膨大であり、面積、収納ともに不足している可能性が高い。また、家事や育児の負担が大きいため、住まいに対する要求度が高くなり末子年齢による子育て期の違いが出ていると推察される。

③ 今後の住まいの重視点

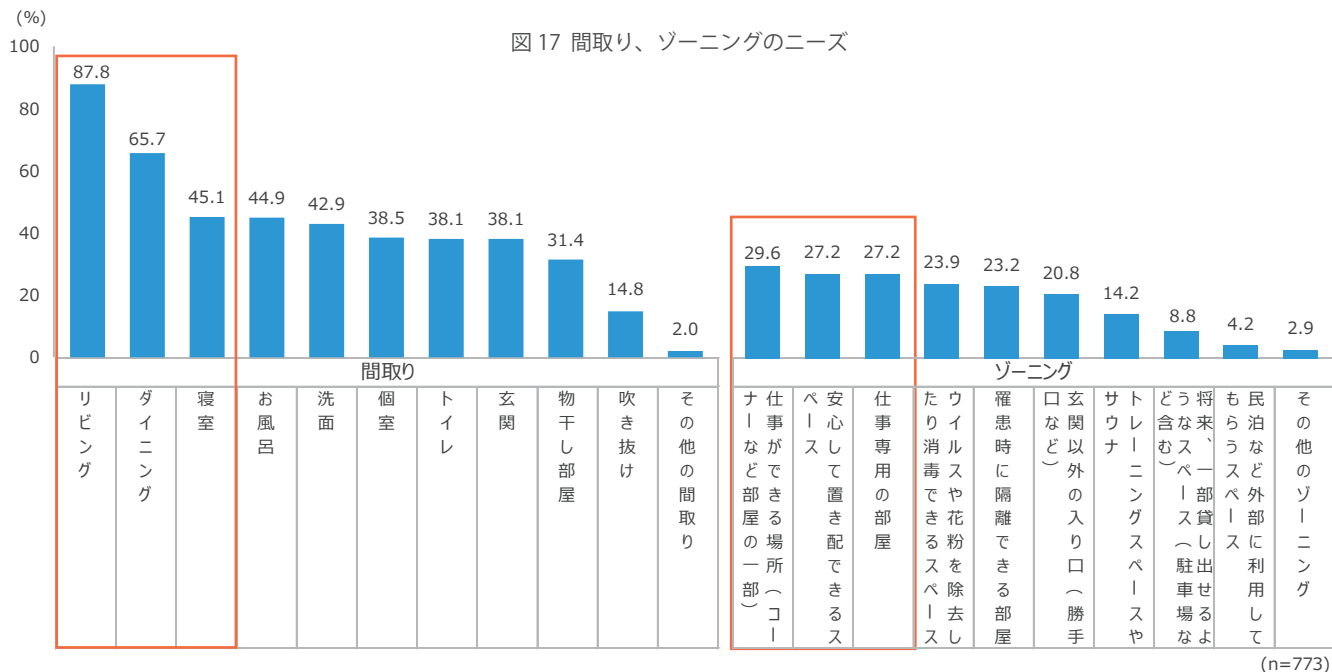
今後の住まいで重視する点を聞いたところ、「間取り・ゾーニング」が最多で58.5%、ついで「建物の耐震性」57.4%、「収納」51.7%の順となった。

図 16 住まいの重視点



<間取り・ゾーニングのニーズ>

間取り・ゾーニングを重視すると回答した人に、間取りやゾーニングのどのようなことを重視するかを聞いたところ、間取りについては、「リビング」87.8%、ついで「ダイニング」65.7%、「寝室」45.1%の順となった。一方、ゾーニングについては、「仕事ができる場所（コーナーなど部屋の一部）」29.6%が最多となり、ついで「安心して置き配できるスペース」、「仕事専用の部屋」がともに27.2%となった。



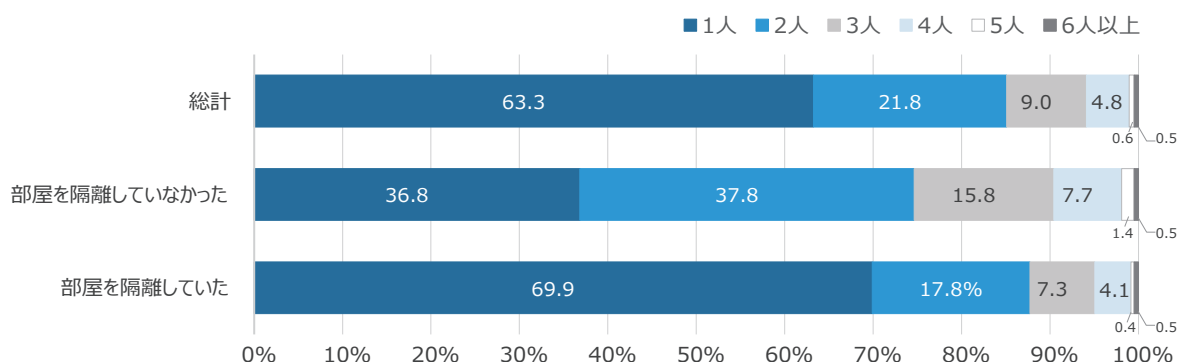
ゾーニングに関しては、今までは住まいの空間は機能別のスペースが主流だったが、部屋の一部で仕事ができる場所や罹患時に隔離できる部屋など、機会に応じて使い勝手や機能が変えられる場所・空間が必要とされていることが推察できる。住まいはLDK+個室というくくりで表現されるが、いかようにでも使える和室・座敷のような新たな可変性をもつ空間を改めて見直す必要も考えられる。

コロナ罹患者家族調査より

① コロナ罹患時の住まいでの困りごと

自分または同居家族が新型コロナウイルスに罹患し自宅療養をされた方を対象に、住まいの困りごとを調査したところ、多くの方が他の家族への感染を不安に感じていることがわかった。家庭内の感染者数は、部屋を隔離していた回答者と部屋を隔離していない回答者と比べて感染した家族数の分布に違いが見られた。

図 18 家庭内の感染者数の分布



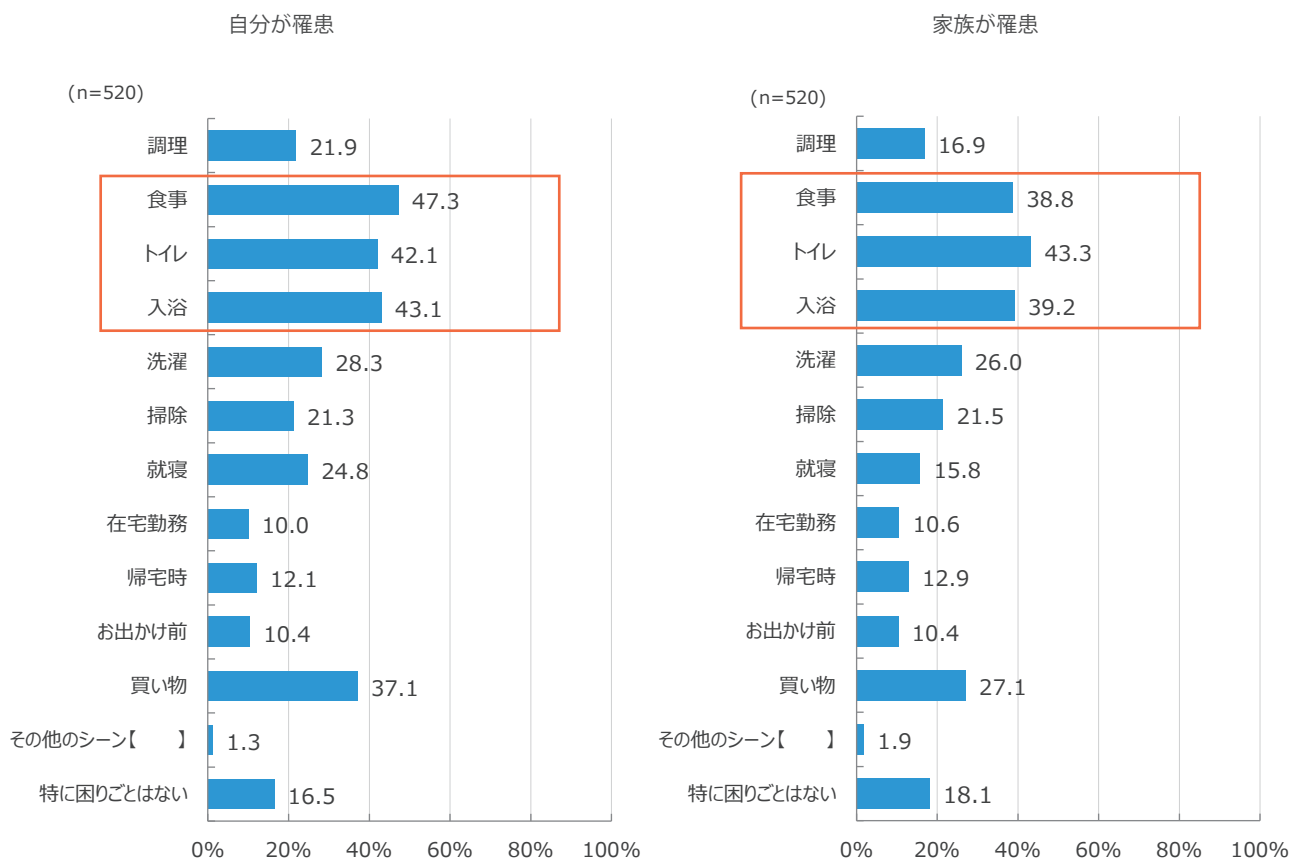
<自分が罹患した場合の困りごと（シーン）>

自分が新型コロナウイルスに罹患している時期、他の家族に感染しないようにする場合、住まいのどこのシーンで困ったかを聞いた設問では、「食事」が47.3%で最多となり、ついで「入浴」が43.1%となった。

<家族が罹患した場合の困りごと（シーン）>

同居する家族が新型コロナウイルスに罹患している時期、自分が感染しない／他の家族に感染しないようにする場合、住まいのどこのシーンで困ったかを聞いた設問では、「トイレ」が43.3%で最多となり、ついで「入浴」が39.2%、「食事」が38.8%の順となった。

図 19 困った生活シーン



自分が感染しない／他の家族に感染しないようにするために、具体的にどんなことに困ったかを自由記述式でうかがった。以下に、主なコメントを抜粋した。

表1 生活シーンでの困りごと（自由記述からの抜粋）

	自分が罹患した場合	家族が罹患した場合
トイレ	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレが1つしかない ・なるべく手が触れないように注意した ・体調が悪いのに除菌などしないといけないのでつらかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・感染者が使用した後に除菌していたが、どこを触ったのかわからないためどこまでやればいいのかわからなかった ・換気が十分されているのかわからず不安だった ・トイレが2つあるので感染者と分けて使っていたが、子どもが理解できずに感染者側を使いそうになるので苦労した
入浴	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな対策が正解かわからない ・家族と時間を分けて入浴した 	<ul style="list-style-type: none"> ・感染者に一番最後に入ってもらおうようにした、家族の入浴する順番を考えるとやりくりするのが大変だった
食事	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の部屋で食べるために食事を取りにいったが、部屋がキッチンから遠いので運ぶのが大変だった ・食事する場所を分けることができず、同じ部屋で食事をとったためうつさないか不安だった 	<ul style="list-style-type: none"> ・（子どもが小さく）食べさせないといけなないので接触してしまう ・別々に用意するのが面倒、感染者が食卓で食べたがるので距離を取らないといけなかった ・使用した食器からうつらないか心配だった

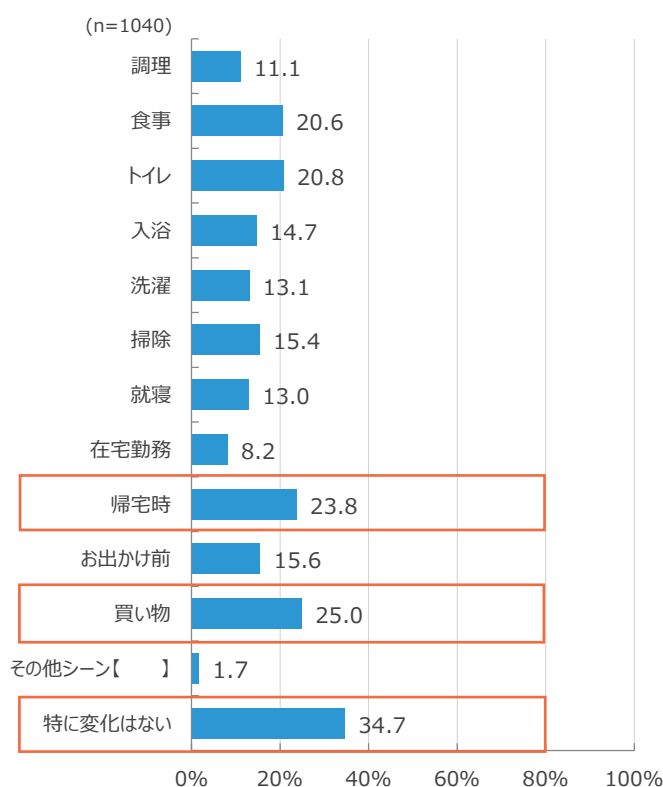
前述のように、新型コロナウイルスに自分が罹患している場合と家族（同居者）が罹患している場合とでは、最多の回答に違いが見られたものの、両者とも上位3項目は「食事」「トイレ」「入浴」であった。困りごとの自由記述は「トイレ」と「食事」が多かったが、「トイレ」は空間が狭く感染リスクが高いイメージがあるからか、自分が罹患していない場合は、感染者のトイレ使用後の除菌・換気に対する不安といったコメントが多かった。「食事」については、部屋を分けて食べた方は配膳、下膳時の接触に関する不安が多く、また、食事は食卓でとった方が一定数みられ、その際の感染リスクについてのコメントも多くみられた。

② コロナ罹患後の生活行動変化

自分または同居家族のコロナ罹患を経験し、生活にどのような変化があったか、それぞれ生活シーンについてうかがったところ、「特に変化はない」が最多で34.7%、ついで「買い物」が25.0%、「帰宅時」が23.8%となった。

自分や家族がコロナ罹患経験者であっても、罹患後の生活においては通常の感染予防と変わらないことがうかがえた。ただし、トイレ、食事とも2割程度は変化があったと回答しており、トイレの使い方（ふたを閉めて流す、消毒・除菌）や食事の仕方（黙食、別々に食べる、大皿をやめる）など何らかの対応をしていることが推察される。家族の団欒や繋がりとしては、それに対してネガティブな習慣がコメントとして散見され、感染の不安解消が課題になっていると考えられる。

図 20 罹患後に行動変化があった生活シーン

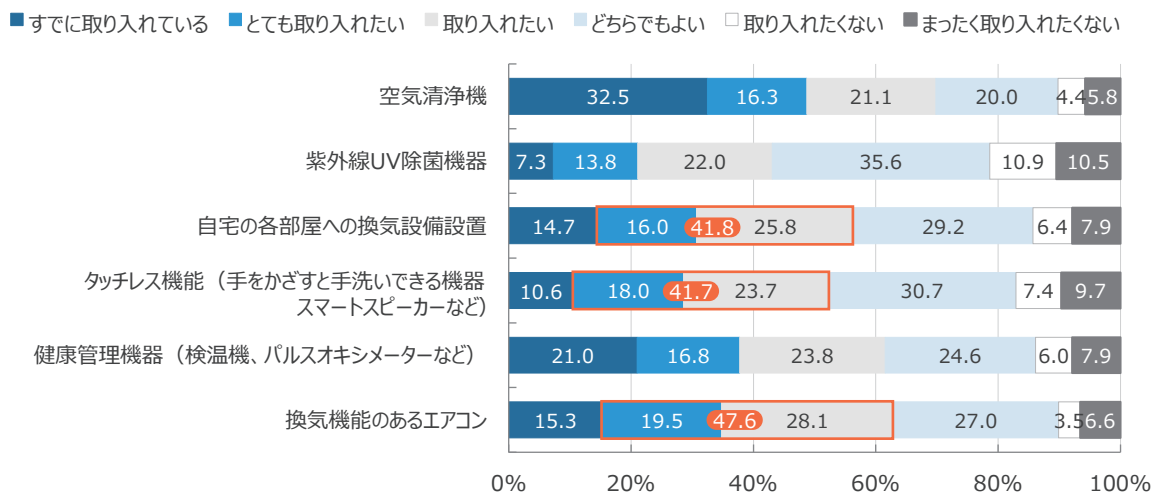


③ コロナ罹患の経験から取り入れたい設備・部品・間取り・サービス

1) 設備

「とても取り入れたい」と「取り入れたい」の合計（以降、取り入れたい層）は「換気機能付きエアコン」が計47.6%で最多、ついで「自宅の各部屋への換気設備設置」が計41.8%、「タッチレス機能（手をかざすと手洗いでできる機器、スマートスピーカーなど）」が計41.7%となった。

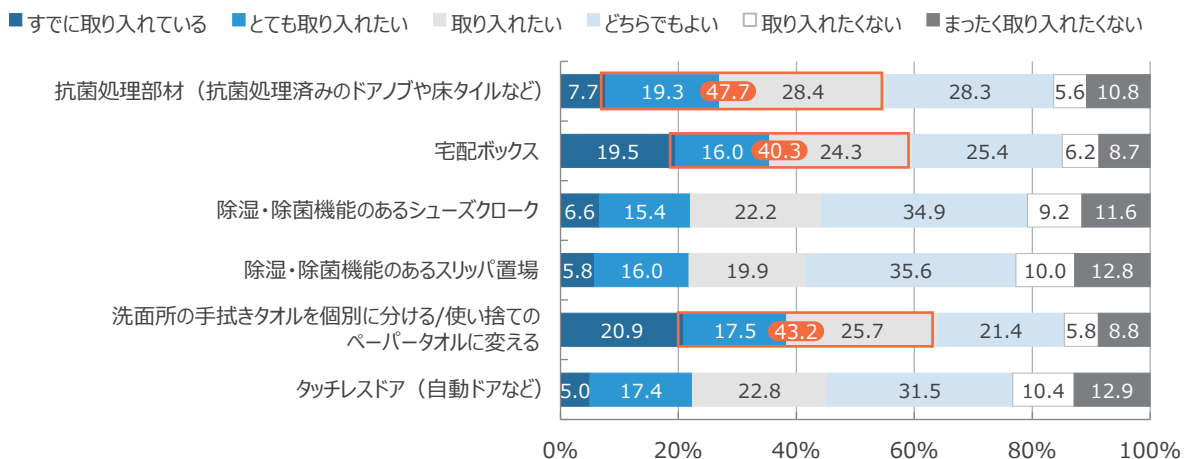
図 21 取り入れたい設備



2) 部品

取り入れたい層は「抗菌処理部材（抗菌処理済みのドアノブや床タイル）」が計47.7%で最多、ついで「洗面所の手拭きタオルを個別に分ける / 使い捨てのペーパータオルに変える」が計43.2%、「宅配ボックス」が計40.3%となった。

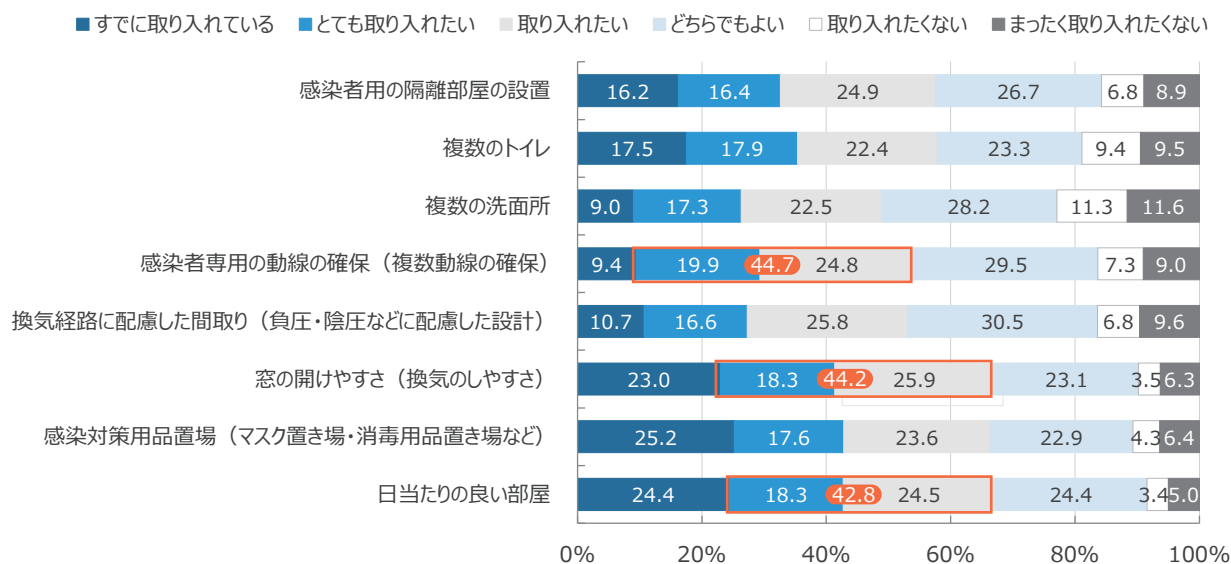
図 22 取り入れたい住宅部品



3) 間取り・設計

取り入れたい層は「感染者専用の動線の確保（複数動線の確保）」が計 44.7%で最多、ついで「窓の開けやすさ（換気のしやすさ）」が計 44.2%、「日当たりの良い部屋」が計 42.8%となった。

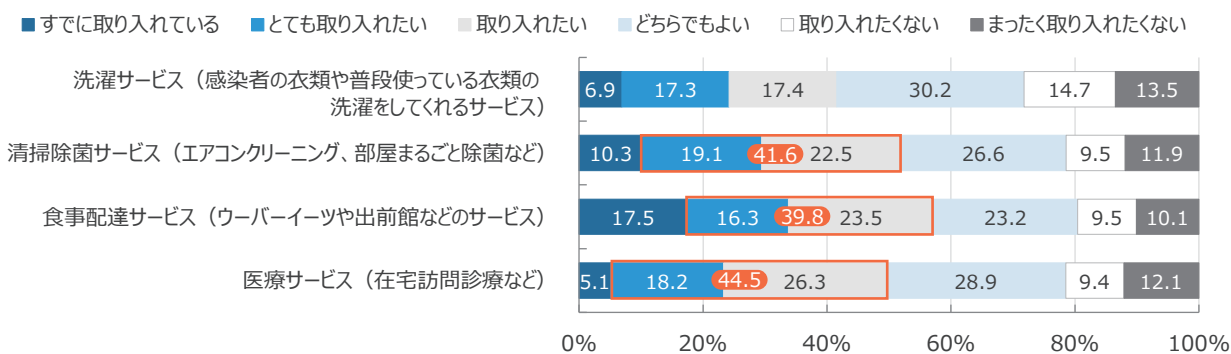
図 23 取り入れたい間取り・設計



4) サービス

取り入れたい層は「医療サービス（在宅訪問診療）」が計 44.5%で最多、ついで「清掃除菌サービス（エアコンクリーニング、部屋まるごと除菌など）」が計 41.6%、「食事配達サービス（ウーバーイーツ、出前館などのサービス）」が計 39.8%となった。

図 24 取り入れたいサービス



コロナ罹患の経験から取り入れたい設備・部品・間取り・サービスは、それぞれですでに取り入れているか否かの差が大きいですが、サービスや部品などはまだ社会には普及していない様子が見えてくる。特に、医療サービスなどは、ニーズが高いものの普及にハードルがあり「すでに取り入れている」が 5.1%と少ない。部品に関しても、簡単に導入できるペーパータオルや宅配ボックスは「すでに取り入れている」が比較的多いが、ドアノブや床タイルの抗菌部材などは簡単には導入できないため、このコロナ禍から新たなニーズとして普及していく可能性が高い。

一方で、設備や間取りは手段が多様であり、目的に対して新たな機能がついた商品や手法が充実してきている。空気清浄機だけでなく、より衛生面を充実させていく除菌機器や換気機能付き空調設備など、新たな衛生面での品質の常識が生まれていると推察される。

人生 100 年時代を迎えて

どのライフステージでも、くらしにフィットする環境の整備

ミサワホーム総合研究所では、これらの調査結果を踏まえ、住まいづくりのガイドラインであるホームコモンズ設計®を見直しホームコモンズ設計 2.0 としてまとめました。

ホームコモンズ設計®とはミサワホームが大切にしている子育て期の住まいづくりについて 2012 年に発表したものです（注 1）。住まいにとっての学び、住まいでの子どもの成長は対話で、成長段階によっても対話の種類、距離は変わるため、成長段階に合わせて対話できる空間づくりができるような設計のガイドラインとして発表しました。しかしながら 10 年たった今、子育て世代を取り巻く環境は変わり、そしてコロナ禍にも見舞われました。

前述した二つの調査では生活者の意識変化、現在の住宅課題を明らかにしました。社会の常識、特に大人の仕事スタイル、子どもの学習スタイル、そして家の中の使い方、滞在時間は大きく様変わりしました。新型コロナウイルスが慢性的に蔓延し、身近な家族が罹患した場合の課題や不安も明らかになりました。また、SDGs が広く浸透するように、持続可能な環境が求められる中、誰一人取り残さない多様性を生かす社会を目指す状況に社会は変化しています。住まいにおいても、子育ての視点は重要ですが、誰かが犠牲になることなく子育てできるようなデザインがなされるべきと考えます。

家庭は小さな社会であり、そこで子どもたちは学び成長していきます（注 2）。ミサワホーム総合研究所では生活者行動観察研究会を通して住まいの中の学び・成長する場づくりがどのように行われているかを研究（注 3）しており、それらの知見を住まいづくりに生かしていきたいと考えています。

今回、子育てにおける成長時期（4 つのステップ）に合わせて、対話による学び・成長と子育てをしながら働き続けられるように住まいの課題を整理しプランニングのポイントをまとめました。

表2 住まいの課題とプランニングのポイント

ホームコモンズ設計2.0 の4つのステップ

成長段階に合わせた家族相互の対話による「学び」「成長」と「働く」ことを続けられる 住まいのガイドライン

子どもの成長段階 (子どもに必要なkeyword)	育みたい能力	対話による学び成長	家族の課題	住まいの課題	学び・働く場のプランニング に大切なポイント
信頼関係 親子の信頼関係を確立する時期 	経験から五感を育む <ul style="list-style-type: none"> 視覚力 (反応力) 基礎身体能力 信頼する力 	直接的 (近い) ↔ 間接的 (遠い) ふれあう ほめる/しかる 見て、見られて 安心感を与える	<ul style="list-style-type: none"> 生活リズムの変化への対応 ワークスタイルの変更、調整 家事/育児時間の増加による負担増 親自身の時間の縮小 	【共通課題】 <ul style="list-style-type: none"> 帰宅時に除菌・手洗いしやすい間取り 空気の衛生を保つ換気や空気清浄 仕事ができる場所 罹患時に隔離できる部屋 作業しやすいデスク環境 良好なICT環境 <ul style="list-style-type: none"> 事故や怪我などが心配 泣き声などがダイレクトに入ってきてしまう 振めたり触ったりしてしまう 	リビングなど <ul style="list-style-type: none"> 親が子に対して手が届きやすい距離感 家族のみんなが集まり対話をしやすい場所 どこからでも見やすく死角がない安全性を確保できる場所 ダイニング・キッチン・個室空間など <ul style="list-style-type: none"> 隙間時間に単独作業できる空間 寝ている子を起こさないように会話の音を遮断できる可変性 (気配、音) ファニチャー <ul style="list-style-type: none"> 子どもに間違っていじられない管理できる収納 乳児期に必要な可動式の育児用具収納
自立心、積極性、羞恥克服 人格の基盤が形成される時期 	体験から想像力と語る力を伸ばす <ul style="list-style-type: none"> 好奇心 想像力 会話意欲 生活習慣の習得 	直接的 (近い) ↔ 間接的 (遠い) チャレンジ 会話を楽しむ 見守る	<ul style="list-style-type: none"> 第一反抗期との向き合い方 子どもを媒介とするコミュニケーションへの参画 夫婦の養育観の相違等による組み合わせ 衛生習慣の習得 通園による生活習慣の形成 	【共通課題】 <ul style="list-style-type: none"> 帰宅時に除菌・手洗いしやすい間取り 空気の衛生を保つ換気や空気清浄 仕事ができる場所 罹患時に隔離できる部屋 作業しやすいデスク環境 良好なICT環境 <ul style="list-style-type: none"> 事故や怪我などが心配 キッチンなど危険な場面に入ってきてしまう キッチンで行われている事が見えづらい 家事などが協力しづらい 	ダイニングなど <ul style="list-style-type: none"> 様々なモノを広げられる充分な広さのある場所 親の気配をしやすい距離感 会話の題材が生まれやすい場や動線 ダイニングやキッチンなど <ul style="list-style-type: none"> 子どもの作業内容がわかる親の視線が届きやすい配置 子どもの興味を引く手元が見えるキッチン 多方向から共同で作業できるキッチン 危険な作業のときに子どもに入れないようにするゲート 個室空間など <ul style="list-style-type: none"> 邪魔されずに単独作業できる空間 子どもが遊んでいる声など、生活音を遮断できる可変性 (気配、音) ファニチャー <ul style="list-style-type: none"> 親がセキュリティ上安全に管理できる収納
動機獲得、劣等克服 好きな事を見つけ喜びを感じ始める時期 	興味から意欲を引き出す <ul style="list-style-type: none"> 知的好奇心 論理的思考力 語彙力 感受性 	直接的 (近い) ↔ 間接的 (遠い) 一緒に遊ぶ きちんと会話 見守る姿勢を見せる	<ul style="list-style-type: none"> 通学による生活の変化 生活・学習の自立支援 家庭内学習時間の増加 ICTリテラシーの差 レジャー等体験学習の増加 子どもの権利の調整 (小遣い等) 夫婦の教育観の相違等による組み合わせ 子どもの学校から社会への広がり 働き方、キャリアの再構築 	【共通課題】 <ul style="list-style-type: none"> 帰宅時に除菌・手洗いしやすい間取り 空気の衛生を保つ換気や空気清浄 仕事ができる場所 罹患時に隔離できる部屋 作業しやすいデスク環境 良好なICT環境 <ul style="list-style-type: none"> ゲームや遊びの音のうるさい ニュースや前編など共有の話題が広がらない 子どもが親に「できた」と見せに来づらい 	ダイニングやリビングなど <ul style="list-style-type: none"> 家族が共同作業できる空間、家具 家族共通で使える道具を共有できる棚、収納 ダイニングやキッチン、リビングなど <ul style="list-style-type: none"> 親子がいつでも会話できる距離感 余計なものが映って子どもの気が散らない視界が確保できる場所 すぐに親に確認できるように子どもの居場所 個室空間など <ul style="list-style-type: none"> 親が単独作業できる空間 遮断できる可変性 (気配、音) ファニチャー <ul style="list-style-type: none"> 家族それぞれが、セキュリティ上安全に管理できる収納
他者からの刺激、子どもへの信頼 自分の興味関心を形にしていく時期 	対話から思考力をつける <ul style="list-style-type: none"> 抽象的思考力 社会性 集聚力 向上心 	直接的 (近い) ↔ 間接的 (遠い) 一緒に行う 経験に基づいたアドバイス 子どものシグナルを見逃さない 信頼を示す	<ul style="list-style-type: none"> 家事総量増加による負担増 生活時間のすれ違い 経済的負担の増加 第二反抗期との向き合い方 	【共通課題】 <ul style="list-style-type: none"> 帰宅時に除菌・手洗いしやすい間取り 空気の衛生を保つ換気や空気清浄 仕事ができる場所 罹患時に隔離できる部屋 作業しやすいデスク環境 良好なICT環境 <ul style="list-style-type: none"> それぞれが勉強や仕事をすると邪魔になる それぞれが一緒にいると居心地が悪い 家族一緒にいる時間が減る (共有情報が減る) 	リビングやダイニングなど <ul style="list-style-type: none"> 家族や友人知人などが共同作業できる空間、家具 家族共通で使える道具を共有できる棚、収納 一緒にいてもストレスがない複数の居場所がある空間 個室空間など <ul style="list-style-type: none"> 親も子どもも一定時間集中して単独作業できる空間 家族それぞれが使用時間を決めて使える籠もり空間 オンラインに邪魔になる音を遮断できる可変性 (気配、音) ファニチャー <ul style="list-style-type: none"> 本や物を飾れる家具、設置 家族それぞれが、セキュリティ上安全に管理できる収納 パーソナルスペースの家具の充実 グリーンなどインテリアの充実

Copyright (C) ミサワホーム総合研究所 All Rights Reserved.

【住まいづくりの変化点】

① 子ども中心の住まいから、住まい手全員が主役になる住まいへ

コロナ禍は私達の生活の常識を変えました。特に、住まいで過ごす時間は大きく増加しています (図1)。多くの企業がテレワークを導入し、親は自宅にいながら仕事ができるようになりました。また、子どもたちも自宅でオンライン学習が頻繁に行われるようになるなど、これまでの子育て時代の住まいでは想定されなかった状況になっています。

家族一緒にいる時間を互いにストレスなく過ごせるような工夫が必要です。また、子育て時期だけではなく子どもが巣立った後など、ライフステージの変化にも対応できるようにする必要があります。

② 専用空間から多用途空間へ

これまでより家族が長時間一緒に過ごす住まいは、その限られた空間を使いこなすために動線やゾーニングに工夫が必要です。前述した調査の住まいの課題でも、間取りやゾーニングの工夫が必要と考える人が多い傾向にあります (図14)。また、空間を特定の用途に限った想定をしてしまうと、ライフステージが変わり使い方のニーズが変わった場合、無駄な空間ができてしまう事や、感染症などの罹患時に隔離するスペースを確保することができません。

家の空間を開いたり閉じたり、空間を切り分けられるようにすると、来客時やテレワーク時、罹患時の隔離など、いざという時、臨機応変に対応することができます。また、ライフステージ変化で使い勝手を変えたいときにも便利です。

③その時の気分や状況に合わせて空間を使い分ける

ゾーニングやレイアウト、家具などからは、人々の行為を誘発させるアフォーダンス効果が生まれます。例えば、ダイニングで座る位置関係や並列して座ったりすることで、声がけ、対話のしやすさ、学ぶ機会は大きく変化します（注3 P150）。また、子どもの成長過程では身体の大きさが変わることによって空間での居心地も変わってゆきます。自分のやりたいことや、やらなければならないことに適した環境を見つけ出し空間を使い分ける（使いこなす）必要があります（注3 P61）。

空間の中に複数の居場所をつくと、ライフステージや生活シーンに合わせて家族それぞれが居心地の良い場所にできる可能性があります。これからはひとつの場所で様々なことをやるより、学びや仕事などの要求事項に合わせて、場所を使い分けていく（使いこなしていく）ことが必要になってきます。そのためには、住まいのどのような場所がどのような事に適しているか学ぶことが有効でしょう。

おわりに

ミサワホームは「住まいは巢まい」という考えのもと、子どもを育てていく場として様々な子育て住宅の提案をしてきました。子育ての環境も変化します。子どもを地域社会や大家族で育てる時代から専業主婦が主役で育てていた時代、そして社会制度を充実させて育てる時代など、時代によっても、地域によっても変わるものです。

そうした時代の変遷と、コロナ禍をきっかけにした働き方の大変革により、家に求められるものも変わっています。住まいは生活を支えるもので人それぞれの日常生活の常識の形成に関わります。それぞれの価値観は違いますが、これらの提案を参考にいただき、より良い住まいづくりに貢献できればと考えています。

<調査>

調査名：生活者の意識変化調査

調査名：2021年3月31日-4月8日

調査方法：Web アンケート調査

分析対象：2年以内に戸建購入を検討されている方

サンプル：773

調査名：コロナ罹患家族調査

調査名：2021年11月30日-12月4日

調査方法：Web アンケート調査

分析対象：新型コロナウイルスにご自身または家族が罹患し、自宅療養の際に他の家族と同居された方

サンプル：1040

<研究会>

研究会：生活者行動観察研究会

調査時期：2013年～現在

調査方法：エスノメソドロジー

分析対象：子育て期の家族

<注及び参考文献・レポート>

注1 エムレポ Vol.88 学びの環境①

注2 エムレポ Vol.99 学びの環境②

注3 『エスノメソドロジー 住まいの中の小さな社会秩序 家庭における活動と学び』
是永論、富田晃夫編著（明石書店、2021年10月）

<https://www.akashi.co.jp/book/b592636.html>

エムレポ Vol.92 働く環境①

エムレポ Vol.96 働く環境②

エムレポ トップページ

<https://soken.misawa.co.jp/news/>